肺がん死亡率低下、NSCLC と SCLC で異なる傾向／NEJM

米国の非小細胞肺がん（NSCLC）による住民レベルでみた死亡率は、2013 年から 2016 年にかけて、性別や人種を問わず大幅に低下していることが、米国・国立がん研究所の Nadia Howlader 氏らによる検討で明らかにされた。低下に寄与しているのは診断後の生存率の大幅な改善によるもので、著者は、「治療の進歩による罹患率の低下、とくに同時期に承認された分子標的治療薬の使用が、観察された死亡率の低下に寄与しているであろうことが示唆される」と分析している。肺がんには、NSCLC や小細胞肺がん（SCLC）など異なるサブタイプがある。米国では肺がん全死亡率は低下しているが、住民レベルでみた肺がんのサブタイプ別の死亡傾向については、死亡届にサブタイプまでの情報は記載されないため不明だった。NEJM 誌 2020 年 8 月 13 日号掲載の報告。

米国がんレジストリのデータから肺がんサブタイプ別の死亡動向を評価

研究グループは、米国住民の 28%を網羅する SEER（Surveillance, Epidemiology, and End Results）18 レジストリのデータを用いて、SEER がんレジストリにおける肺がん死亡について評価し、肺がん死と罹患例を関連付けることで、特定の肺がんサブタイプに起因する住民レベルの死亡傾向（罹患率ベースでみた死亡率）を評価した。

また、肺がん罹患率と生存率についても、がんサブタイプ別、性別、暦年別に評価を行った。解析は、ジョインポイントソフトウエアを用いて行い、罹患率の変化、罹患率ベース死亡率を評価した。

NSCLC 死亡率は罹患率よりも早く低下、分子標的薬の承認時期と一致

NSCLC 死亡率は、NSCLC の罹患率と比べてより早く低下していた。この低下は、経時的な生存率の大幅な改善と関連しており、分子標的治療薬の承認時期と一致していた。

男性における NSCLC 罹患率ベース死亡率は、2008～16 年は年率 3.1%だったが、2013～16 年は同 6.3%だった。これに対応した男性の肺がん特異生存率は、2001 年に NSCLC と診断された男性では 26%だったのに対し、2014 年には同 35%に改善していた。この生存率の改善は、人種や民族にかかわらずみられ、また同様の傾向は女性でも認められた。

一方で、SCLC 死亡率は、罹患率の低下とほぼ完全に一致して低下しており、生存率の改善はみられなかった。この傾向は、調査期間中の SCLC 治療の進歩が限定的だったことと関連していた。

＜関連文献＞

Howlader N, et al. N Engl J Med. 2020;383:640-649.
https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/32786189/

当コンテンツは、株式会社ケアネットの監修により、がんに関連する重要論文を選別し、それらを簡潔に要約したニュースレターです。当社の見解を述べるものではなく、承認外使用を推奨するものではございません。内容の詳細については元文献・元ニュースを、製品に関する情報は各製品の最新の添付文書をご確認いただきますようお願いいたします。

尚、当コンテンツに掲載されている記事等に係る所有権、著作権その他一切の権利は、ニプロ株式会社、株式会社ケアネット、コンテンツ制作者等の著作権者が保有しています。

公開日 2020/09/08